

## 今日のみことば

### □ 3月12日(日) コリントー 5章

パウロはコリント教会の中に生じている不品行の実例を取り上げるが、この出来事を単に個人的倫理の問題としてでなく、コリント教会の処置を重視する。

### □ 3月13日(月) コリントー 6章

ここには「あなた方は知らないのですか」と言う言葉が6回出てくる。訴訟事件の根底にある原理的課題として教会に与えられている新しい存在としての恵みを再確認する。

### □ 3月14日(火) コリントー 7章

ここには結婚の問題が記されている。コリント教会からの質問であったが、パウロの明確な答えはなく「自分のからだをもって神の栄光を現せ」と言うのみです。

### □ 3月15日(水) コリントー 8章

偶像に捧げられた肉を食べることは正しいかどうかと質問に対して、自由であることは正しいが、他人の良心を傷つけるなら、その自由を行使すべきではない、と言う。

### □ 3月16日(木) コリントー 9章

パウロは福音宣教のために必死であった。彼は福音によって生きる望みを与えられたからである。人を救うためなら、その人々に仕える奴隷となる決心をした。

### □ 3月17日(金) コリントー 10章

人は順調に行っているときは過信しやすい。荒野をさまよったイスラエルの多くの人々がたどった道は、厳粛な警告となっている。自力で立っていると思う者は、倒れぬよう気をつけよ

### □ 3月18日(土) コリントー 11章

パウロはコリント教会の主の晩餐を巡る罪を指摘し、本来守るべき正しい方法を提示する。教会の存在の目的、何のために公同礼拝を守るかの課題と結びつけて語る。

---

ろ ぼ No. 1806  
2017年 3月12日  
日本バプテスト 立川キリスト教会  
牧師 大川 博之

---

使徒言行録12:5

こうして、ペテロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心に祈りが神に捧げられていた。

エルサレム教会はステパノの殉教以後、多くのクリスチャンが離散して、使徒たちだけが教会にとどまっていると言う状況の中では教会の勢力はいちじるしく衰退して行きました。ユダヤ人民衆もキリスト教会に敵意と反感を抱いていました。ヘロデ・アグリッパ王はそれを見逃す手はないと、教会の中にある人たちを苦しめようとして手を伸ばしてきました。

その手始めにヨハネの兄弟ヤコブを殺害しました。その教会弾圧政策がユダヤ人の気に入ったのを見て、エルサレム教会の指導者であるペテロを狙って、祭りの時期に捕らえて牢に入れました。これまでもペテロは幾度となく捕らえられていましたが、このたびはステパノ殉教後であり、しかも教

会弾圧の政治的意図と、民衆が歓迎していると言う意味で、はるかに教会にとっては重大な意味を持っていました。

ペテロを捕らえられ、主要な指導者を失った教会はどうか。ヤコブが殺され、ペテロが捕らえられて、少なからぬ動揺が教会の中にかかることは避けられません。しかし「教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられ」ていました。人々は脱獄の計画を立てていたのではありませんでした。そのような実力も意思も彼らにはありませんでした。教会が持っていたものは、万物の支配者である神に対する祈りでした。祈りこそ人間を変え、人々を動かし、世界を揺さぶる神の力を引き出す、

強力なキリスト者の武器です。どのような時にも、どのような場所でも、キリスト者にはこのすばらしい方法が与えられています。

教会が成立したのは、使徒たちの篤き祈りによりました。キリストが天に上げられてから、弟子たちは約束を信じて心を合わせて祈りました。主は約束を果たして下さり、ペンテコステを通して教会が誕生したことは、私たちの大きな喜びです。主は三千人からの仲間を加えて下さりました。ペテロとヨハネが捕らえられた、彼らの信仰の証しに抗することができず、釈放された時、弟子たちは感謝の声を上げ祈りました。「祈りが終わると、一同が集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語り出した」(使徒4:31)とあります。祈りは場所と時は選びません。

私たちはゲッセマネでのイエスの祈りの姿を(ルカ22:44)を決して忘れるものではありません。またパウロが働きのために祈りを求めた(コリ15:30)言葉を覚えています。祈りは、常に祈らなければなりません、単独で祈るのではなく、信徒が共同で祈ることは大切です。スポルジョンは自分がいかに祝福された働きが出来ているか、その秘密を教えると友人を連れて行った場所は、教会の地下室、人々がスポルジョンの働きのために執り成しの祈りをささげている祈りの場所でした。教会は祈りを通して神様の栄光を現すのです。

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————  
ルカ8:41-42, 49-56 危機に際して

死は私たちにとって向きあうべき悲しみの最たるものです。私たちはどのように死と向きあっているか。死を前にしてあがらっているか、運命だと達観しているのでしょうか。

ヤイロという会堂司は、娘が死の境をさまよっているので、イエスのもとを訪ねてお出でを求めました。父親の悲しみはみんなの共有することでした。すぐにイエスは出かけられましたが、大勢の人たちが同道して、歩みは遅々と手進まず、娘は亡くなりました。イエスはヤイロに「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる」と言われ、娘の両親とペテロら三人を連れて部屋に入れ、泣き悲しむ彼らに「泣くな、死んだのではない。眠っているのだ」と言われました。彼らはあざ笑ったがイエスは娘の手を取り「娘よ。起きなさい」と言われと、娘は起き上がった。何を私たちは見るのですか。そこにイエスがおられたということです。



Read God's Word.